

6-7.9.11

環
沙
田
開

✕
k 44

富士山文庫
✕
290.9
Ka
1

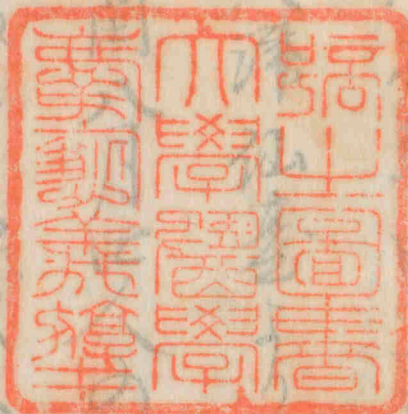
林三又

環海異聞卷之一

文化元年九月曹西重國使布大伯長

崎入の源 辰巳二年

乙世 者 辰巳二年



不慮 上 辰巳二年

辰巳二年 辰巳二年

辰巳二年 辰巳二年

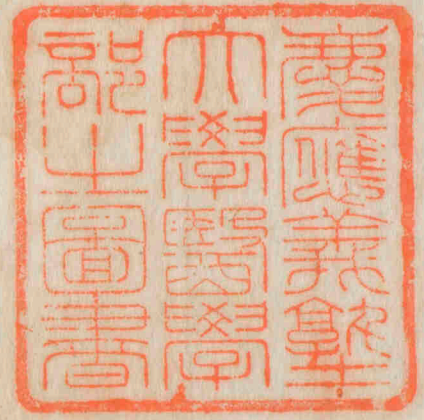
P.000

0125.01

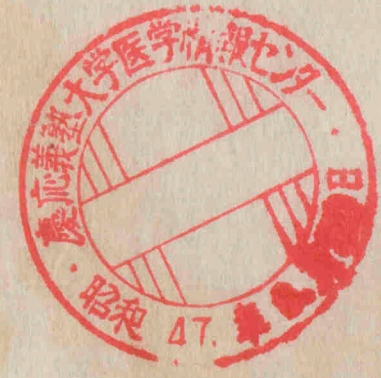
Handwritten text on the right edge of the right page.

290.9
K

No. 2516
12 15 44



164



富士川文庫

林三又

環海異聞卷之一



文化元年甲子九月魯西亞國使節大伯長
崎入津仙臺より源客に人連取り同二年
乙丑閏八月に人の者後 公儀より取事
下薩上は後平井村太史 薩田弟助
虎目身 等長崎。是を因所出を以所より
陸より同十二月に戸口を記す事

大槻 實

志村

弘強

今世より是に依て同

月廿五日午後より同に起し翌丙寅二月

迄先天下に在りて
明也長居にあたり
遷居たに水に少書

高城郡幸風沢漢五帝降

水互

津太史

丑六十歳

柳生郡津谷室漢三帝降

同

治多湯

丑四十四歳

宮城郡幸風沢漢五帝降

同

九平

丑三十三歳

柳生郡津谷室漢

太十帝

世三十三歳

太十帝伐長河
幸風沢漢五帝降
幸風沢漢五帝降

柳生郡幸風沢漢五帝降

柳生郡幸風沢漢五帝降

九月長河幸風沢漢五帝降

柳生郡幸風沢漢五帝降

柳生郡幸風沢漢五帝降

五刻者先年出國詳如船本漂流之故
并今度歸朝仕仕始終委曲之儀也尋尋

九月廿七日

勘者九月十三日以前實政五年癸丑十一月廿七日
牝麻部石卷沖船政平多清占正曆正用本新小
寫本這面本英法米子三百之拾貳俵
江戶表石卷比積り同本米沃在平之座船八百
積者宮丸二十日及帆之船之積更

十月十一日
積入

牝麻部石卷沖船政

平多清

五城部石卷沖船政

舵五九太丈

同

水五張三席

同

同五之助

同部石卷

同辰藏

牝麻部石卷

同清藏

同

同八三席

同

同五六

同

同

市上席

同那小竹溪

同

茂治席

同

同

吉良次

同那石卷

炊

己之助

右格三人、物より口人於合拾六人、系紐陰鑑、石
房よりひ縄三房、草縄二房、狭道、石巻、
役人横より、道状等、船頭受取、帆仕、
たし通、此度、

一 十月廿七日、石巻湊、船風ハ一向、無風、

東名浦へ、較、沙、葉、

一 同、廿九日、光り、風、小波、中、日所、船、凡、二十、

程、沖、岩、磯、浪、底、磯、迄、光り、如、申、南、風、吹、

お、一、度、船、中、へ、波、お、通、候、候、候、

荒、浪、お、中、

一 同、晦日、西、風、小、波、船、岩、磯、浪、底、の、前、に、船、が、り、

仕、

一十二月朔日
志連陰付
檣松
尾
乃
友
臣
國
之
方
へ
船
相

向テ戻りてハ
仕ルハ半時
頃古地一
向正書見
頃

一 因二日曉セリ
少風ニ吹飛リ
又ハ光リ
起リ
仕ル

又申酉凡の雲り浪荒くお波船を吹かぬ

船危し
要ふ
系組
者
咎^{モト}を拂ひ
佛^{ハツ}に

新雲より牙金限りは
お働の坊貴地より一
向の相

足下市以色ハ暖屋跡之仲と光中ハ

一
同三日風氣日通吹豫之山守
瓶柱を伐採中

此節後、
ハカモウ、
又、
足、
之、
中、
に、
船、
多、
葉、
中、
に、

一 因に日風ハ因極りて致し方至成る目迄ニ至る

涉舟半日程
劍ハチ橋ハチ船フネ漂ユル舟中
計名地
方云

一向是江戶中より以後、大抵申酉戌南

票
風
られ、地方の吹来
机合
毎日
改作
門
乾
中
中
商
人

風多く東より来り
芝より花より
又中より
救日漂着なり

一 聖安
 卷改
 六年
 正月
 六月七日
 以又比
 大浪
 王
 標
 立

方殘米一石半分稅又一分稅害一石二廩

引セ冷水を擇り 水凌山のようく 方角も不毎
流況事と致し 居左の

一日月十日申酉の大風吹強を打破れぬひの口ハ
その氣は水破し 同日とハ概し裂け度繩を以て引
物ぢとをけ帆を解き其帆は歩地五舵乃 方
懸座所懸も波よりあつれぬる系組者子残表の
方又活中の船中船へ水もい席ハ一向美ひし
け度ハ波ありぬ降し席海ぬ至おもひし

漂きの席を破るそのはハ何をも 沙垢難を
とりぬをいのりしは多かハ格別ぬあり
中さぬるハをばさる

一日十二日十二日風ハ方のなり船右のようく 大破江
ゆゆ裂け割きぬもうりハお成中の事あり合の
強等を破る 船りはけ中の船座ハ破事ハ冷水
海り間壁ハ是を破る捨ぬるの事ハおもひし
て流れ破事ハ仕ぬ板を破り切りも無事なる

百里と申しより以て八下り申しそれよりハ
追々近くお城七百里と申す下り申す

一因二日天氣も能く船柄を帆柱より中の
車^{チャタツ}より結ひ舟帆をかきそけ紐を引せ風は
似せたり数日の万漣の一様在中

一因三日辰に蘇々吹整り此とも多く八申周
成^北南西風より流る申す

一因四日入りくも三日古目以後の風合と大抵

因一吹水いやり雨の所天多をより海の重き
湯を流き申す

一漂流を来い所を折く時五降りて日本の
そのより五月は入りても折く言海より来る
一船々船乃席定りしる船路より沖へ来
ゆれを因かじと申す大船を足折ゆる所有能く
人より訓をいしおに海流乃る足南より
方、ついに折も折く大きく船はえゆるハ

に信も有し船等のくは極子たぐましく
此れは中なりハ船の毎用ありあゆみ何れ
えられぬおあり面は浮ひく有りといひ
休もく船をくを繞り舞ひく舟を動かす
りもせきくくスルくくく云々
飛ひよりくく変て人々馴れりくすの氷も
浮ひ在りく
梅りーオ・ブハ漢名 信天翁
一名信天翁の一種なるべし
一海と地よりくをききくハ氷をききくく

沖はかきくくくありて常くえられぬ
くくくくくくくくくくくくくくく
方近きくくくくくくくくくく

一五月九日曉方辰に蘇の大風ありてきりく
六日頃より何とそ地よりくありてきり又の
神國を上り地地方三百里と神國よりま
日く神國をくくくくくくくくく
四八日よりは五十里とく神國よりく

一 四十日朔 曉竊 ともや此れは内よ系船よりなるり向ふ船の

ともきとのえつげは能くえぬ也をみて少き船より
此れは何れ地へも是くあるまきふと略れは
中朔をすはともや略れは月の新よりなり
そよ世実乃より言ふ山をゆくえすや
ゆきまて海上漂流の中へ振夷松葉の身へ流されは
るすともなりなる此衆時なりぬを略り山をえす
ゆへるれ日本之地をえられは是れあるへと始め

てな——
ヤルけはハ二里なりも浦松おそく仙臺
磐井那の駒ヶ嶽程の山なりとえすや山系組乃者
とも何れも略れは能くえぬ也をみて少き船より
山乃卯辰轉の方岩根へ船流れ多し波歩程まで
岩あり一舟切り岩より山石よりて甚だき
海の下より中よりなり一舟よりて是れは岩なり
船をハ岩の色岩より石を下りて三層よりけり
系り略れは能く略れは能く略れは能く略れは能く
系り略れは能く略れは能く略れは能く略れは能く

そと舟より乃果移し移しコナク船をもちて人
を乗せし所へ小舟ある所へ上陸仕ゆ所日本乃
地と云ふ事一神地と云ふ近きと云ふ事
も明く漢語にて有る事ありと云ふ事
なり人衆も明く言ふ事なりと云ふ事
破を言ふ事船の事を言ふ事船の事なり
波より砕くれ流沈みゆ事なりと云ふ事
小舟より人の中へ入る事なりと云ふ事
追々言ふ事

王けく人衆を言ふ事なりと云ふ事
國を言ふ事國の人衆なりと云ふ事
の事と云ふ事國の人衆なりと云ふ事
の方五十里又五十里と云ふ事
ある事なりと云ふ事
地方は流ひ事の方へ二日程の程と云ふ事
乾の方を言ふ事

一 六月五日朔り立月と云ふ事

1
月尚より手系り船を運送せし人衆三人程おえ
堀中より皆く悦ぶ事と陸に度なりけり色とり
場所宜し何とて配りておえし月向ふおえの不見
官を色へ船を早し系えしおえをとり砂も
ある所より三人の色人方も宜初梅をたてえし
とおえ船を早しゆ方へ系えしおえの中は砂浸漕
あへ初めの人よりけり三人の和は船合三人程の人
程系ゆを系えしおえに既に残切りて船を長くのを

面をいよくし度ゆ身体うて衣被はるの程又獣の皮
うて作りゆ物を系えしおえに既に残切りて船を長くのを
人間と見えしゆ向ふ何う程をけり程をけりゆとも
一系えしゆ何れも系えしおえに既に残切りて船を長くのを
くあがれゆと見えしおえに既に残切りて船を長くのを
まずゆりて程系えしおえに既に残切りて船を長くのを
辛苦程しゆ程系えしおえに既に残切りて船を長くのを
系組の内年より者なりゆいともいふ小船を運け

延ゆりも成する愛深鬼人のもゆり何とのもも延
て中にもまゝたふ余とまひひき下す川上陸のこゝ
中にもまゝ一変仕揚りてやとなれば彼ともハ
初めより拙者たを漂流の者と必死ととおえへま
川へ船を引とてゆれよとの仕形致し拙者も亦
り當時より引とてゆれや

船を引あげ何とも陸へより急ぐ人を見ひの御の
りよて男ハ鼻をお糸女ハ桶或ハ皮袋ハ水を入れ

持来り船より有るは襦をゆひきけ果をけりて煮て
給へりねと仕形に――中にもまゝのとき、拙者をお
糸これを持ち用ひゆへて火をたきやこれむけ
砂屋はまゝこれを要する等、拙者ゆれよと自
身は麻ゆき――仕形に――んせりの拙者も亦初
よりたは怖あけりなり拙者も亦速より拙者たを
数日漂流して殊の事艱難辛苦して糸ゆきと
合点致しゆれよと仕形に候何角ハ氣味あゝく

今夜中の福を祈りて
杯とやらは酒も玉極成の
ては是こそ是れはたんも明く申せり中の程は月の光
うれ成と申すは翌日より後にも福人とのとく
皇朝美の積物も持来と之より瑞ある入し来りし
瑞を以て有合の年をもかきけき給へ中の福人の
少何れのものに恒に仕えや外の人衆とてもおえ
中よりすしに彼者も仕取うて教へるなり持運い
中の枯葉を愛さし何れもこそ是れ申せり中の福を

比叟廿十月、より寅の六月を海と漂流のる分
月よりして初めく工陸仕仕

一男女の衣履えす仕り受くるの所て仕り
とりぬりそ履を脱毛のすくむき綴り合せ
てえとのよい一毛の多を四すてえ履
女の扱ひそ履き合せぬと右の多の骨でぬり
あつあつそ鼻の孔へ糸をこふ一衣履の飾り
よろり骨くやけやゆはるの骨えき鉤こかり也

一衣被の仕立りく男女たるは肩袖よりく袖体
縫詰り唯此を穿きしをよりあけをき
お後をくよりく縫合せ縫あるき袋のや
裾の方ハ被事ハ廣く仕立りたるものなりこれを
裾よりかぎりこの孔より縫むるをち―両袖
と縫りゆき今く身ハ縫ひゆかちの仕
立ゆ婦人こそ小児ハ乳を乃ませゆきハ裾乃
ちより懐へ入れ乳を含ませ後の縫りて

細帯を志あやハ極寒のち地中へ衣被乃仕立
ちケ換りしと足地中の

一男女ハ蹴蹴スリスリよりく歩ち仕立男ハ太のとくそ
面よりく黒くハ仕立仕―婦人ハ顔色も白く自
然と柔あるよりく大樽衣被の婦人の
也―縫テ足指あるハ口の早へ入るい―

又鼻の隙子鼻の筋部ハ穴を穿つるハ
サキヘヨリタレカチ
鼻のより――そ穴へ横より小き樽を縫小

鼻を洗ふやう——お其様への小指は鼻骨
より細く——なる連環とトケと唇の上際を
さかりやう又硝子のやき玉でもさげは是を
オロミイア 恥辱用と朱のうきさへ中の髪は
長く長——^{オット}丈とちの婦人の髪乃ほ
れは後口の方うく——
の子ハミツは組分ケさげゆて毛やう又耳を
耳輪のうりへさきぬれをあげやうてちやう

鼻よりトケゆ極なるおをトケやうこれをはは
鳴——のやう——うて幼少より鼻板へも
耳輪へも穴をあけゆ——

一は鴻の名を「オンテレイツケ」ストロとやうこれも
オロミイアより名付ゆ名のう——えの名に似と
やうやオロミイア 穢りて鴻のうをオロストロとやう
鴻人乃其名をアリヲウトウレとやう

伊勢光太史話とアミシヤ—ワカのはよアシデ

レイスカ」と云ふ所より橋のすか「オストロソ」と云
流人の姓名をアレシーツカといふとそれ
因に名ある——河をうふ名あるや

一 邊人いう所の所は住居や家郷とてハ見へ
やと云ふ所より見ゆへて何れも穴居スミヤと云へや
け渡りやを急よ土窖ツチアナ有るや造り方此様子をえ
ゆ此平地へ深く穴を堀り蔭室ムロの如く致し
ゆおれり穴の上ハ拾ひ集め盡ゆ流れ木たを

いゝ屋根の骨とれ——古藁のときき草と藁

きりけきとよを掛るやゆを云中より二人は云

寸足方よりとあふあふこれ屋上の煙窓ケムダシよ

傾りけは別ちか入の所とすそ口下は向ひ

井ノホリヤク井入の構やうのおはなれは是ハ平らめ

れる木よきりそを背ゆとのおはなれは窖乃ツチアナ

うちハ人数の多からうう廣校有るや様えん

け木ハ樹木総く生——やきす枝木は致ゆお

れく且風雪と岩更崎より極よ平地へ深く
穴をほり住居を成ゆるといふ事ゆかしき事なれ

袖ハハ氣味あゝゝゝなり夜入めてゆふふ中ゆ

廁セツインハふふふく谷百岩石の陰ケありて二

便所は便しヤル女ふふふをゆとて右

便所の極子ありと云ふゆへ便ハれくゆ

一同八日船政平々清船中より水種の花おれゆふ

船中極よりゆふふふゝ病死仕ゆ外致ふも世に

砂地を凍くほり衣着とてせゆ中ゝて埋めゆ

一同十二日 是の人と云ふ極子あり事以 皮船より皮の衣履

中極と云ふ事ありてはふふふ冠りゆ極く びふふふゝ船の極カイ

極を極よ板より上陸す 是オロシイア人なり 耶々

船人ふふは袂袖をとりてせまゝと云ふ事ハ寸オウりの靴

とてせむ合十人より系りゆられ是船固のため

とてせむ極より極まのよりゆ所よりオロシイア

彼所は度ゆふ事といふゆゆゆ味のゝめ系ゆふに

一 魯西亜人ハけろ人トハ眼^{メサレ}衫面^レ之^レ一^レ体^レの容顏

一皮船並皮の着扱ハ商人の用也之
ありに

の外は犬の皮鷹の皮の衣類も作り用ひ

右魯西亞人漢へとり拙を其に向ひ何ヶ拙し
中

人あつてを名に
おゑ乃
哨船テマフチへ乗り水等二

たて何うと申し物をたお繋ひま
航権を承るは

仁義と合点仕り一本
帆柱を豪傑は松子と仕

これ日本あるうとやゆるとなゆ史
けあすうも

ニッポンと申すは初め日本人と申すは
極子に在り

一進くは少仕人をして航海に
之を以て立しるを本に航海は日本に限り
おえへ申すは彼の人日本船一本乃航海
極る事ありて航海の仕様
是れは日本人と申すは航海の仕様
日本人と申すは航海の仕様
航海の仕様

四つは丸よりしては航海の仕様
こゝろと申すは航海の仕様

一は卵の形を以て子言ふの卵の由來
卵より大なるは卵の形を以て子言ふの卵の由來
友肉も卵も食料といふは卵の形を以て子言ふの卵の由來
綴り合せ衣履も作りし事と為す
やうな事と為す

同十二日朝方時辰に南風吹石魯西亞人殺害

捕らるる系舟の脚船ヒナフネを爲人より買ひ寄せしめてこ
まゝに系舟に仕立てし。右へくも一國は系組の船
作り日夜に時次同急乃内五寅軒の方ありし
小湊に名存す

一 け所「アツカ」とし、所の由やよりオニデレイ
ツケ付肉より魯西亜中ふよりのお湯を
有る小湊と求へしお船の場あり彼
國の里強としてふ十里程あり二五初源忌の

ありしハけ所と百里程と求へし

け所よりハに百石積込乃魯西亜船三隻多人
系組系舟り陸よりハに十人より住み候子
兄ハハ魯西亜中ふが役人お張り候し、系り居
し、三年めは交代候し、山に掛るハけ所、名存後
より飯倉を所へ煮煮を陸へ振舞し、
け所は結合し船よりより世話候し、所をた證し
同所は海軍仕より、お湯をるハ海軍へ流し候し

本を拾ひあけいも傳本はこれよりきりあて強く
傳ふもふお成りなす取肉のすれと致しあやの

け臨の中へ五月十日致し上陸はともへ里
其場有又あを常巨し六月よりより
謝急人よおをせ話を受る所は常九日
同しけナツカへ来り中は接へとりは二十日
程よりお成け所は是とてめり事お成れそ
ケ年程同はよる成れ

一 け臨ヲロミヤお成地よりよりハ東の方より
心ヲメリカは原し中

一 臨の廣サ何程成りしとれ中しは是前後
大小臨ありしとお成ひ古きは成りナア
ツカはけ中の小溪とお成へ中

一 臨の肉樹あると云ふそれ成りも夢のこ
とき夢と云ひしを成りあうも用ひしは
夢よはしし夢とハ成りあるおは成り

一 第一防風おそい日は日本の海より遠く

一 本文よりいふ袋の海獣の胞裏のよりある

一 油のれも入る

一 食おにきく魚れを拾ふ 汐ありて

一 煮つけヌコ のこよのせききといへる食

一 いちいけりてもたへる拾ふきよそを

一 の骨は若くも部あも拾ふきよそを

一 甚穢あはれいけり見地よきいものよてハ

一 外よりいふ海獣はれ煮汁用ひゆるといへ

一 一 鱈ハ年中は産れいけりの果と肉をいれ

一 その方細りふ太くは産れ名を「テレワカ

一 とりゆ年中の食おに用ひる

一 一 煮ゆとこりよ切彼葉のこききよを包み

一 二 塩をいれ煮とて包みとていれ

一 一 塩又冷水より煮とて肉を拾ふてかき

一 一 塩の油又いこーニキアサラシ

子ルハの油の目を入用ハヤル油ハアサラエ至て
きれいし味も空しく此座ハ

一 鰻 ウツタ 鰻 ゴホー 之 カレイ 比目魚 ハラトフ も此座ハ

候け新ハ時節より新れハ青魚ハ月
始よりとれりてお月ハ鰻ハ別ハ鰻ハ
ふ仕自死のお流もあゆるおハ此座ハ

鰻ハヤル

一 鰻。鳥ハ有ハ鳥ハ形大キく啼き人を驚ハ

ミクアツくハヤルハヤルハヤルハ

一 鰻のこも、鰻啼き並ハ尾も鰻ハ此座ハ

有ハ足ハ山ハ低ハヤルハヤルハ人ハ

としセツトヤル

一 光太丈日鰻をオロミイアうしリミツト

と足ハヤルハヤルハヤルハ

一 海鰻を突ぬハ鰻のときたそ此座ハ

五六人鰻ハ火お石の焦きヤあるを

一男女ともは髪はきり男は髪は項より前後
 (かききけ) 後の方の襟の下より背^{カサ}を
 肩の上隠し切掛へり
 一麻布より梅^{ウメ}下着をきり着る者もあり
 有るは是もオロニア本国より渡りゆきあり
 一衣物の襟のよりハコジキの毛皮で縫ひも
 此^{コレ}なり

オロニイウケ島
 穴居並嶋人其土
 室^ハ出入之圖



コトシキ図

コトシキにコーライカ
なりく「ヨリキ」
いし海のとあや「瓶」
すくものもと「瓶」
海瓶なりと「瓶」
いりなり「瓶」
ふふと「瓶」



三方程より人そ穴の口へ入り居りし
腰より上は身節ありし腰の面を其
身よりとりし舟の皮より張結ゆものなり
其穴の面を端を袋乃かぎりのとく紐を
一垂人そ穴の内より居りし紐を引走腰乃
圍を引走めり舟より舟荒浪の中へ入
りても船中へ入らず舟の舟体も動かさず
すよ波ゆものとおえへし楫の



うねのまゝそま中を打ちた右へはり
ひろ漕きやゆ

け船家やあしづね反轉するなり急人

ヒツクリカヘル

の急をえりし海客へ舟を横舟を載し垂
彼穴の内へ先所長を金又次より一方のみ
をえりし舟より舟より舟より舟より舟
り舟楫を使ひありし急を舟より舟より
楫を打ちし腰の切やゆか減ありてよる

そと海梅能経珠とそへ何の造作もあきなり
まゆへ繋るもよるも又よる轉のるれ

一 種はあきハ坪の日をえ合せあるゆへ種あり

まゆも引そへやすし 漁り魚獸ともは種あり

舟のりへ金や山若風烈く浪荒く波ゆく

例のそく種のかかり引つりや

一 舟は自然と能経はあき山本をえ種あり

下地を接へそへ皮を張りこち舟や皮

はセイウチと市海獸の皮より

一 そ皮ハ剥ぎぬき生皮より 裁枚もあきより

小口と小口をつき金金縫う 糸を糸へ

あきハ縫ひゆて 幅度のもの又は巾を用ひ

糸ハ糸の節よりしてはる 縫ひ 梅は糸節は日本
も縫ひの法は

用る 天衣かとり 先針より 穴をあけ糸縫

より 糸を縫う 糸を糸の先へ糸の毛のこも

さすをより かしこ糸より 糸の糸より 糸の糸

て縫ひ合せつゝうとすゆえに縫ひ目忘れさ
るやうに縫ひしやゆえに縫ひ目忘れさ

糸の毛をよりぬきこすやゆえに糸
はうつきこすゆえにとすやゆえに

一 繻の節は自死の繻流るたる時より縫ひ

セイウチの牙より縫ひ縫ひのまゝに縫ひたる

ものより糸より縫ひ縫ひのまゝに縫ひたる
は糸縫平針糸の
針は糸あり

一 古皮の縫合の糸は糸より縫ひ縫ひのまゝに縫ひ

縫合せし後を縫ひ縫ひのまゝに縫ひ縫ひのまゝに縫ひ

の縫ひ縫ひは糸より縫ひ縫ひのまゝに縫ひ縫ひのまゝに縫ひ

糸縫合の糸は糸より縫ひ縫ひのまゝに縫ひ縫ひのまゝに縫ひ

は縫ひ縫ひは糸より縫ひ縫ひのまゝに縫ひ縫ひのまゝに縫ひ

糸縫合の糸は糸より縫ひ縫ひのまゝに縫ひ縫ひのまゝに縫ひ

一 セイウチは糸より縫ひ縫ひのまゝに縫ひ縫ひのまゝに縫ひ

糸縫合の糸は糸より縫ひ縫ひのまゝに縫ひ縫ひのまゝに縫ひ

糸縫合の糸は糸より縫ひ縫ひのまゝに縫ひ縫ひのまゝに縫ひ

糸縫合の糸は糸より縫ひ縫ひのまゝに縫ひ縫ひのまゝに縫ひ

糸くねり本の方より一寸より五寸程長さ

ハ二尺程より三尺程迄も此度ゆ ハヤ取ても
象牙は能く似

中んろく細工おとせひ中ん事平け牙の小切を根牙より
持系仕付け度の後部を献上公商とおさへけ
中ん二尺程より三尺程迄迄のもの面平中程持渡り
中んおとせひけりるさゆへ等しお度りゆりとおえ中ん

に御ありて ミツカキ 濃有こと アミカ 海濱の程又似中ん皮ハ

牛皮よりいかり一落一毛はさりやうて舟へ

もちりそ那のころも用ひ中ん

け歎折し陸へもちり中ん水歎中陸までを

自中しゆきうひんをと持又ハ戒るとして

お教す事ハ何事 別あゝ又中

梅し 和名書し氷海の産ぞーパールトニ

海濱

セー かん フにといふ物の名は説ありし乃や

ウチー かん フにといふ物の名は説ありし乃や

オクキヨノ図

